慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	漢三國六朝紀年鏡銘集録増補(其一)
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.135(463)- 138(466)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

漢三國六朝紀年鏡銘集錄增補（其一）

梅原末治

昨夏、『漢三國六朝紀年鏡銘集錄』なる小冊子を印行してから早くも滿一ケ年になつた。此の間に同學友人等の好意に依つて新に存在を知ることの出來た紀年鏡を數へて見ると八面の多きに上り、また右の書のうちに銘文其他に就いて後考を期した漢延熹□年鏡を調査する機會をも持つた。でいまそれ等を纏めて、增補第一の稿を作り、本誌の餘白を借ることにする。

新たに知り得た紀年鏡を時代に依つて分つと後漢鏡が二面、吳代と六朝との鏡が各三面である。次に『鏡銘集錄』の體裁に倣ふて銘文を擧げ、然る後に若干の解說を加へよう。

一　後漢延熹七年獸鈕獸首鏡（圖版第一の一）

〔主銘〕　延熹七年正月壬午。吾造作尙方明竟。幽凍三岡。買人大富。師命長。（文中・點を附したのは左文字以下これに倣ふ）

〔副銘〕　長宜宜官。

東京の帝室博物館の新收品で、本年の考古學會總會の記念繪葉書に收めて世に紹介せられたものである。鏡はいま三片に破碎してゐるが、徑五寸弱の佳良な白銅質から成つて、圖文は扁平な表現の獸首文であるが、鈕上の双獸形の浮彫と共に極めて鮮かな鑄上りを示し、紀年鏡中の罕に觀る精品をなしてゐる。多くの同式鏡に於けると同じく、鈕の周圍に位置した所謂絲卷狀の圖形內に副銘を容れ、主銘は內區の次の帶にあつて左行に表はされ、それから二十二弧の所謂內行花文と菱形の兩文帶を置いて緣となる。

本鏡は最近朝鮮平壤附近の樂浪郡の遺跡から出土したものであると云ひ、同時の出土品に相似た獸鈕と別な夔鳳鏡とが二面ある。三者の示す黑白の班色をなす美しい水銀銅の色澤は此の所傳を裏書きするが、たゞ私人の採掘に係り、

爲に自餘の伴出物は固よりのこと、出土遺跡の狀態などの明ならぬのを遺憾に思ふ。

二　後漢中平三年神獸鏡

中平三年四月十二日造明作明鏡宜侯王。

上海某氏の蒐集品と云ふ。廣瀨都巽君所藏の拓影に依ると、鏡は徑約四寸一分の半圓方形帶の神獸鏡で、形式吳代の紀年鏡と規を一にするものである。銘は外區にあつて左行左文で短い。

三　吳嘉禾四年階段式神獸鏡

嘉禾四年九月午日安樂造作□□五帝明竟。服者大吉。宜用者高壽。[illegible]年□□□□

京都守屋孝藏氏の新收品であつて、本年五月下旬其の藏品の一部を展觀せられた際にはじめて存在を知つた。同式の嘉禾四年鏡は、既に一面同じ守屋氏の藏鏡中に存してゐたが、これは漆黑の銅質をした佳品で、圖文の鑄上りもよい。なほ銘文は外區にあつて左行である。

四　吳太平二年神獸鏡

〔主銘〕太平二年。造作明[illegible]。可以詔明。宜侯王。家有五馬。千□羊。

〔副銘〕天王日月。天王日月。

上海某氏の手にありと云ひ、廣瀨氏の所藏拓影に依つて其の存在を知り得た遺品である。徑約四寸の吳代の紀年鏡に通有な半圓方形帶の二神四獸鏡で、主銘は外區にあり、右行ながら造の一字を除いて、すべて左字に表はされてゐる。文中の詔は昭の譌字である。

五　吳寶鼎元年神獸鏡

〔主銘〕寶鼎元年十月十□[illegible]。造作明竟。百凍[illegible][illegible]。服者富貴。宜公卿。大吉□[illegible]□

これ亦同じく廣瀨都巽君の好意で存在を確め得たものである。同君の拓影並に所見に從ふに徑約四寸の半圓方形帶を伴ふ二神四獸鏡で、白銅質ながら黑味がゝつた地色をしてゐると云ふ。銘は左行で外區にあり、別に半圓方形帶の方形格內に一字宛の副銘を容れてゐるが、簡單圖文化されて「日」の字を繰返したに過ぎない。主銘のうち百凍の次の二字磨滅して明でないが、寶鼎二年神獸鏡の例から推すと「精銅」と見て誤りはなからう。

六　西晉泰始六年繪模樣神獸鏡

泰始六年五月[六]日鏡公王君青同大□

昨年上海の白堅氏が京都に將來した遺品である。廣瀨都巽君の手拓本並に調査記錄に依るに、鏡は徑六寸に近い年

號鏡としては大形（面の反り一分三厘）の白銅製であつて、背文は所謂環狀乳繪模樣神獸鏡の形式に屬し、銘は內區を繞る半圓方形帶の半圓部にあり、一字宛表はして右行となつてゐる。廣瀨君は紀年の泰始を以て劉宋代のそれに當てんとしてゐられるが、內區の圖樣や、既知の泰始九年鏡等と比較すると、やはり此の西晉の泰始と見るのが穩當であらう。

七　西晉太康三年神獸鏡（圖版第二の一）

〔主銘〕　太康三年歲壬寅二月廿日。吾作竟。幽凍三商四夷服。多賀國家人民息。胡虜殄威天下復。風雨時節五穀熟。大平長樂。（左行）

〔副銘〕　吾作明竟三商

昨年末京都川合定次郎氏の許で實見した新出品である。徑五寸五分餘あり、鑄上りの佳良は銘文と相俟つて守屋氏所藏の太康三年六月卅日の銘ある一鏡に酷似し、そこに自らなる時代相を示す。內區に配した二神四獸は肉刻の趣を多分に持つた整齊な式で、これに加ふるに朱雀と玄武との圖形を以てして、內區を複雜にしてゐる。なほ主銘の新莽王氏鏡と殆んど同じ事も注記すべきである。

八　西晉太康四年神獸鏡（圖版第二の二）

太康四年正月廿八日。造作青竟。幽凍三商。青龍白虎。東王之公。西王之母。富貴世〻吉利大平。（左行）

徑四寸五分の扁平な大きい鈕をした遺品で、前者同樣の神獸鏡であるが、圖文の表現が銳利でなく、其の半圓方形帶の如きは銘も文樣も共に省略されてゐる。白銅質ではあるが、いま背の一部を除いて大半褐綠鏽にて覆はれて、爲に外觀の美を殺ぐ。

此の鏡大正十五年頃支那から齎されて、帝室博物館の藏に歸したものである。こゝに『鏡銘集錄』に漏れたそれを補ひ得ることは一に同館矢島恭介君の注意に依る。

＊　＊　＊　＊　＊

右に列記した新資料についで延熹□年鏡に就いての補正がある。『鏡銘集錄』の同鏡に關する記載は長廣君の調査に基いたのであつたが、昨年になつて實物が再び內地に帶歸せられ、本年五月の大阪山中商會の展觀に先立つて詳しく觀ることが出來、こゝに銘文に就いて若干の改訂を加へる機會を得た（圖版第一の二）。いま新に讀み得た全文を擧げると次の如くである。

延熹□年五月十五日丙□□□□同竟。其所有者王父母。位至三公宜古市。大吉。

なほ二三の釋讀し難い文字を含むが、これに依つて延熹七年鏡であり、從つて五月十五日丙□の單なる鑄造の吉辰として干支の實際と關係なく用ひられたことが確められ得る次第である。尤も紀年の次の數字を表した所は、破碎した鏡を接合した部分に當つてゐて字畫が明瞭でないが、前文で假定した九又は五であり得ず、七とする外ない殘畫を示してゐるのを知つた。でこゝには七年として、前文の比定を改める。

以上の資料に對する年代順の表を附記して此の紹介の文を結ぶ。

紀年	（西紀）A.D.	鏡名	所藏者及出典
後漢延熹七（正月）	164	獸鈕獸首鏡（朝鮮出土）	帝室博物館藏
同　延熹七（五月十五日）	164	獸首鏡	大阪山中商會舊藏
同　中平三	186	半圓方形帶神獸鏡	據廣瀨都巽君拓影
吳嘉禾四（五月）	235	階段式神獸鏡	京都守屋孝藏氏藏
同大平二	257	半圓方形帶神獸鏡	據廣瀨都巽君拓影
同寶鼎元	266	半圓方形帶神獸鏡	同　上
西晉泰始六	270	繪模樣神獸鏡	上海白堅氏將來品
同太康三（二月廿日）	282	半圓方形帶神獸鏡	京都川合定次郎氏藏
同太康四（正月廿八日）	283	半圓方形帶神獸鏡	帝室博物館藏